

ことです。

3つめが工事工程の問題です。新幹線の札幌駅は、在来線の駅より新千歳空港側に少し寄ったところにつくることになりました。今、こうしたことでいろいろな工事が具体的に始まっているところでもあります。

これをつくっていくに当たって、当初は手稲山を抜けて札幌駅まで高架でもってくる予定でしたが、その後、計画段階から比べて都心部の市街地開発が進み、大深度地下トンネルで札幌駅の手前で地上に出て入って来るようになりました。シールド工法で掘っていくのですが、その残土をどこに処理するかが決まらないうと、この工事がいずれ進められなくなってしまうという大きな問題を今抱えているところです。

3 地域交通の維持

私どもはコロナになる前から、地域交通におけるローカル線の問題を、経営改善上の重要課題と位置付けて、6年前に線区別取支とともに、当社単独では維持困難な線区として、13線区を公表しました。そして、この6年間の取り組みの中でどういうことを学んできたか、どういうことに力を入れてきたのかをご紹介します。

1つは情報開示と丁寧な説明。自助努力だけでは解決できない規模だということを、各自治体や地域の皆さんにご理解いただくために、真摯な姿勢で臨むことを心掛けてきました。

2つめは、世論の理解醸成です。国を中心としたシンポジウム、それからテレビで特集番組を企画していただいて、あえて出演したりもしました。厳しいご意見をおっしゃる方はなくなるわけではありませんが、サイレントマジョリティとして、当社の実情をご理解いただける方たちを増やす努力をしてきました。

そして3点めが、国の明確な方針を示していただけたことです。経営自立に向けて新たな支援の枠組みをつくっていたのですが、平成30年4月、経営改善に向けての監督命令をいただきました。その命令書の中で、夕張線や日高線、留萌線、富良野～新得間の根室線のいわゆる赤線区については、「地域の足となる新たなサービスへの転換」を進めなさいと。そして、今後とも鉄道として残していくけれど、抜本的な改革が必要な路線、石北線、宗谷線などの黄色線区については、5年間の集中改革期間を設定して、徹底的な検討を行って結論を出しなさいという命令を出していただきました。

これがあったことで、さまざまな形で国も地域に入り、説得を繰り返していただき、最終的には監督命令に書いてあることが決め手になって、事柄が前に大きく進むようになったのかと思います。

資源もエネルギーもヒトも循環させる サステナブルブリュアリー

【講演者】

尾畑酒造(株)専務取締役（真野鶴五代目蔵元）

尾畑 留美子 氏

(2022年11月18日)

1 佐渡島に帰る

尾畑酒造は、佐渡島に5つある酒蔵の中の一つです。1892

年創業の小さなこの酒蔵で、私は次女として生まれました。子供時代は、離島に生まれたため外への憧れが強く、映画雑誌などを見ながら、外の世界に思いを馳せていました。

大学を卒業して映画会社に就職し、刺激的で楽しい日々だったのですが、1994年にターニングポイントが訪れます。元気だった父が入院し、人間、いつかは死ぬのだと、20代っぼく感じたわけです。そのときに自問自答したのが、明日もし地球がなくなるとしたら、人生最後の日に何をしたいか、ということでした。答えは、うちの蔵で、うちのお酒を飲みたいと。なんだ、最後にそれをしたいのなら、もう蔵に帰ろうと決めて、佐渡島に戻りました。

戻ったときは、根拠のない自信に満ちあふれており、「佐渡を私に変える！」くらいの強い意気込みでした。では、実際の佐渡島はどうだったかというところ、人口減少や少子化、観光もピークを超えて下り坂になったところでした。酒市場もどんどん縮小していて悪戦苦闘、何をやってもうまくいかず、佐渡を変えるところか会社も人間関係すらも変えられない、落ち込む日々が続きました。

そんな5年間を過ごしたところに、ある事件が起きました。それがきっかけとなって、一つだけ変えられるものがあることに気がついたのです。それは自分でした。自分を変えようと決めて、その日からどんどん外に出るようになりました。販路を見直して東京にも行きましたし、海外輸出にも挑戦しました。プロモーションをし、飲んでいただくとスベックもおいしい、味もおいしいと言っただけです。でも売れませんでした。

そんなときに、ある気づきがまた訪れます。2007年に開催されたインターナショナルワインチャレンジという世界最大のワイン品評会に日本酒部門が設定され、いろいろな蔵がお酒を出品しました。うちも「真野鶴万穂」というお酒を出品したところ、栄えある第1回目で、このお酒が金メダルをいただきました。金賞を受賞した酒蔵は全国で11蔵あったのですが、どのお酒を飲んでも、どんな思いでつくったのかとか、どういう場所でできたのかということがイメージされるお酒ばかりだったのです。そのときに思ったのは、それまで自分は、スベックや品質の話ばかりしていたと。でも品質がいいのは当たり前。語るべきは個性である。では、お酒の個性というのはどこから来るか、それは生産地なのではないか。そんなことに気がついたのです。

2 四宝和醸

それから当社では、酒造りに関して一つのモットーを掲げるようになりました。酒造りの三大要素は「米・水・人」です。そこに生産地である佐渡を加えて、4つの宝を和して醸す「四宝和醸」という言葉をつくったのです。佐渡といえば、朱鷺が棲む自然環境の豊かな場所です。これをきっかけに、いろいろな国にプロモーションに出かけると、お酒のことだけではなく、佐渡のことをたくさん伝えるようになりました。

こうすると、飲んだ人が、佐渡に来てくれるようになってきました。日本酒というのは、生産地の物語を伝えてくれる語り部の役割があるということが、自分の中で発見できるようになりました。佐渡を変えようという意気込みで戻ってきた私ですが、逆に自分を変えたことで見えてきたのが宝の島、佐渡という姿でした。

3 学校蔵

136年の歴史を持つ旧西三川小学校は、日本で一番夕日がきれいな小学校と謳われていながら、廃校になることが決まっていたところ、ある日突然主人から、この木造校舎が朽ちてしまうのはもったいない、ここを酒蔵にしようと言われてきました。それを聞いて、私は猛反対しましたが、主人に連れられてその丘に立って海を眺めてみたら、素晴らしい景色があって、何とも言えない風が吹き抜けていくのです。振り返って、私の口からついて出たのは、「これはやらねばならぬ」という言葉でした。

2010年に廃校となり、翌年、佐渡市から借り受けることが決まり、2014年から「学校蔵」、私たちの2つ目の酒蔵として稼働を始めたのでした。

①酒造り～地域資源の保全と活用

学校蔵の運営には4つの柱があります。1つ目はもちろん「酒造り」。原材料はオール佐渡産というものを掲げており、佐渡産米を使っています。

佐渡には現在、560羽ぐらいの野生の朱鷺がいて、農家の皆さんは、朱鷺の暮らす環境を守るために低農薬、低化学肥料のお米づくりをしています。一定のルールに則ってつくられた「朱鷺と暮らす郷づくり認証米」で酒米をつくってもらっています。契約農家の佐渡相田ライスファームでは、この認証制度だけでなく、牡蠣殻農法というのを行っています。汽水湖の加茂湖で養殖された牡蠣の殻を利用して有機肥料をつくったり、ドラム缶に牡蠣殻を詰めて、そこに小佐渡山脈からの伏流水を通すことで、山と海両方のミネラルが田んぼに入ります。そうすることによって、健康で高品質なお米ができる。そして何よりも地域資源の循環というものが、このお酒を通して、皆さんに伝えることができる。そういうお米です。

また、佐渡は2011年に日本で初めて世界農業遺産になっています。その多様性を感じる景色の一つが、岩首地域の昇龍棚田です。400年の歴史がありますが、実際には変形田が多く、後継者不足もあって大変だということを、農家の大石さんという方から聞かされたことがありました。ならばということで、この棚田米を継続的に購入させていただいて、お酒をつくるようになりました。このお酒は「龍のめぐみ」という名前前で販売しています。お酒造りを通して、棚田地域の持続に酒蔵からも参加していこうという思いで始めたものです。

②共生～再生エネルギーの導入

2つ目の柱が環境との「共生」です。お酒造りのエネルギーも佐渡産にしようということで、太陽光パネルを設置しました。再生可能エネルギーを取り入れることによって、佐渡のとてもよい環境を少しでも見える化できるのではないかと思います。

③交流～学校蔵の特別授業

3つ目は「交流」です。そのメインになるのが、2014年から始めた学校蔵の特別授業です。授業のテーマは「佐渡島から考える島国ニッポンの未来」。佐渡は自然環境、文化、歴史に多様性がある、日本の縮図と呼ばれています。一方、課題が詰まっていることから日本の縮図と言われています。まさに課題先進地ですが、見方を変えれば、課題先進地は課題解決先進地にもなり得ます。ゆえに、佐渡から何かヒントを得られれば、大きな島国日本の未来にも役立つのではないかと考えてきたテーマです。授業はホームルームから始まり、

1～3時間目が先生方の講義、最後の4時間目は生徒が主役の生徒総会です。この小さな特別授業が、いずれ未来を変えようとする特別授業になればいいなと思って続けています。

④学び～酒造り体験プログラム

最後の4つ目が「学び」です。酒造りを学びたいという方を、1週間通っていただくことを条件に受け入れています。この体験プログラムは、8時半に集合して、蒸米から始まります。熱々のお米を取り出して粗熱を取る。これをムロに引き込んで温度管理をする。利き酒のテストや本社での勉強。それから田んぼも訪ねて、1週間後には無事卒業ということになります。本格的には2017年からスタートしたのですが、2019年には海外からも6カ国7名の方に、1週間佐渡にご滞在いただきました。

こうやって長期滞在をしていただくと、地元の方とも仲良くなります。さらに、リピーターが増えるきっかけにもなっていて、例えば、去年参加したドイツの方は、今年も1カ月間佐渡に滞在されました。そうやって、コミュニティが広がっていているなど感じています。

お酒造りを学ぶことは地域を学ぶこととイコールです。小さな蔵ですが、私たちにしかできないこと。それはリアルな酒蔵、そしてリアルな佐渡島というものをお裾分けしていると考えています。お裾分けのいいことは、一方通行ではなくて双方向。そういう双方向で、継続的な関係を生むところが素敵なことだと思っています。

4 コロナ禍で見えてきたもの

コロナで酒業界も大きな影響を受けました。うちは本社で観光のお客様も受け入れているので、そこに誰も来なくなると、お店を閉じて、潰れるのではないかと心配した時期も長かったです。ですが、どこにも行けないうけれど、ここにいたからこそ見えたこと、それが私たちにもありました。

以前から、酒造り体験をより本格的に行ってほしいというリクエストがあったのですが、そのためには夜中の作業があったのですが、泊まらないとできない。泊まる場所はさすがに難しいと思っていたのですが、元ランチルームが広いことに気がつき、ここに個室と共有スペースのある宿泊エリアをつくり、今年の6月に完成しました。なので、1週間のうち2日目の夜だけここに泊って、夜中に麴ムロでの作業が行えるようになりました。7月には元職員室を改装したカフェテリアをオープンし、酒米や酒粕、地域の食材を使ったメニューなどを提供するようになりました。

さて、コロナ禍で見えたものがあつたと思います。例えば地球の限界。戦争も身近なものになっていると感じています。そんな中で、これからは金融資本だけではなく、自然資本、エネルギー資本というものが大事であり、それがたくさんある地方の価値が高まってきたと思います。

では、佐渡はどんなふうになっているかということ、比較的若い40代の方を中心にした移住者の方が増えています。都会では時として難しい人とのつながりがたくさんあるのも地方の魅力です。そしてリピーターや観光の方、いろいろな人が混ざって、前庭からアイデアを生んでいきたいと思っています。前庭は、広場と言ってもいいかもしれませんが、学校蔵も、そういう前庭の役割もしていると考えています。そうやって混ざることができる場所があると化学反応が起き、いろいろな

アイデアが生まれることで、今までとは違う新しい成長を地方から発信していきたいと思っています。

5 これからの取り組み（学校蔵第2章）

学校蔵では、廃校を酒蔵に再生して、生物多様性の地域資源と再エネを取り入れてお酒造りをしています。これによって、資源とエネルギーを循環させています。

特別授業という、混ざって学ぶ場をつくって多様性から化学反応を生む。毎回佐渡の高校生が参加していますので、この高校生たちがどんどんと気づきを得て、アクションが変わっていくといいなと考えています。

それから酒造り体験プログラムでは、長期滞在型のお酒造りの学び場というものを用意しています。いろいろな国の人が来てくれるようになって、学校蔵と世界がつながるようになりました。でも大事なのは、学校蔵と世界がつながることではなく、このつながりを地域とつなげていくことです。そのために実はカフェをつくったのです。お酒造りに来ているいろいろな国の人やうちの杜氏がランチを食べたりしているところに地元の家族連れがやってきて、横に座って佐渡の話で盛り上がりたり、そんなことが起きるといいなと思っています。

来年には、学校蔵にコワーキングスペースをつくる予定で、インキュベーション機能みたいなものを目指しています。また、近い将来には、学校蔵をゼロカーボンブリュアリーとして自立させていきたいと考えています。すなわち、学校蔵というのは、資源もエネルギーもヒトも循環させるサステナブルブリュアリーとして、これからも頑張っていきたいということです。

岸田政権の行方と日本を取り巻く国際環境

【講演者】

ジャーナリスト

歳川 隆雄氏

(2022年12月9日)

本日は、私自身が取材し、あるいは直接得た情報、そしてそれをコンファームした内容について、しかも大手メディアが報じないディープな話をお話したいと思います。

1 自民党と日本維新の会

12月2日に、自民党の茂木敏充幹事長が高木毅国対委員長を伴い、日本維新の会の馬場伸幸代表、藤田幹事長、遠藤国対委員長を招いて、料亭での席を設けました。つまり、自民と維新の実務のトップの会食です。この会食が実現するには伏線がありました。11月24日、日本維新の会の前代表、現在大阪市長の松井一郎さんが自民党本部を訪ねました。松井さんの訪ねた意図は、2025年4月から始まる大阪万博開催について、自民党の全面協力を、茂木さんから言質を取っておくことでした。

そのかわり、茂木さんも維新側に要求があったのです。そこで茂木さんは、臨時国会の会期内に、旧統一教会をめぐる被害者救済のための新法成立に全面協力してほしいということのリターンとして求めたわけです。すなわち、12月2日の料亭会合は、自民・維新のパーティーの場になったということなのです。

2 自民党と国民民主党

それだけではありません、この12月2日というのは。夕方5時55分、時事通信社が「自民党が国民民主党を自公連立政権に加え、玉木雄一郎代表を入閣させる案を検討している」という速報を流し、大騒ぎになったのです。

噂はこれまでもありました。とりわけ、麻生太郎さんや茂木さんは、自民党長期政権の大きな原動力となってきた公明党、創価学会への依存体質から脱却すべきだという意見を持っていました。そして、岸田新体制がスタートした時点から、この2人は本格的に、動きとしては水面下ではありましたが、この依存体制から脱却するべく、独自のチャンネルを使ってまずアプローチしたのが、国民民主党だったわけです。それが12月2日の時事通信の速報だったのです。

さて、岸田総理は同じ日の夜8時過ぎに、官邸で内閣記者団に対して、「私は全く知らない。私自身、そういう考えを持っていません」と言っただけでぶら下がり会見を打ち切ったのです。そして、その日の夜遅く、11時半過ぎですが、赤坂の議員宿舎のプレスルームに現れたのが、当の玉木雄一郎氏です。駆けつけた記者団に対して玉木さんは一貫して、「報道のような事実はありません。私も大変驚いています」。堂々巡りを繰り返すだけです。

結局、玉木追及はそれで終わりということになったわけですが、考えてみてください。でき過ぎでしょう。タイミングが合い過ぎているでしょう。この時事通信の速報は、いうところのリークなのです。リークしたのは麻生さんか、岸田さんか。つまり、時事通信に対して失礼を申し上げれば、書かされたわけです。結果としてムードづくりに協力したということです。

3 内閣改造と世論調査

1月8日ないしは9日、岸田総理はジョー・バイデン米大統領との日米首脳会談に向けてワシントンに出発しますが、その前に、内閣改造を行うと私は見えています。その際に、国民民主が連立に加わり、自公連立政権がスタートし、玉木雄一郎氏が閣僚として入る確率は相当高いと判断しています。

つまり、政局的に言うと、現在の岸田内閣の支持率は、NHK、朝日、共同通信の世論調査の結果、33、37、31.3%という数字が出ています。12月の読売新聞と日本テレビの合同調査でも支持率は39%。ですから、それでも平均値が35%を割り込んでいるわけです。30%を割ったら黄色信号点減と言われ、25%を下回ったら赤信号が点減、すなわち政権が危険水域に達したという判断が、永田町、霞が関では行われるのです。つまり、現時点で岸田政権の内閣支持率から判断すると、岸田政権は限りなく崖っぷちに追い込まれつつあると言ったいと思います。

4 決断力と発信力

では、どうしてなのか。どう打開しようとしているのか。

岸田さんはよく言います、自分には聞く力があると。確かに、昨年10月、政権を立ち上げて、コロナ禍の中でもそこそこやっているし、人柄もよさそうだし、人の意見に耳をかすという印象が有権者に定着していた。それが春を越してから一転したわけです。もちろんコロナ対応の失敗もあります。それ以上に大きかったのが、安倍元総理の銃撃殺害事件後に発覚した、旧統一教会と、とりわけ自民党国会議員との密接な関係です。